

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



13

よろこびの知らせ
第13集

目 次

主の御名によって来られる方 ……………	1
ルカ 19:32-38	
神のものは神に ……………	10
ルカ 20:19-26	
新しい契約 ……………	19
ルカ 22:19-20	
この杯 ……………	28
ルカ 22:39-46	

ここに収められたメッセージは、2020年10月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれてお
り、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

主の御名によって来られる方

ルカ 19:32-38

19:32 使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。

19:33 彼らがろばの子をほどこしていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか。」と彼らに言った。

19:34 弟子たちは、「主がお入用なのです。」と言った。

19:35 そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。

19:36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。

19:37 イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、

19:38 こう言った。「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。」

ユダヤの人々は過越祭をエルサレムで祝いましたので、過越祭が近づくと大勢の人がエルサレムへと向かいました。イエスと弟子たちも、そうした人々と共にエルサレムに向かいました。きょうの箇所は、イエスがエルサレムに入った時のことを描いていますが、イエスはどんな仕方でエルサレムに入り、人々はイエスをどのように迎えたのでしょうか。そして、そのことは、現代の私たちにどんな意味があるのでしょうか。

一、ろばの子に乗って

イエスは「ろばの子」に乗ってエルサレムに入りました

た。エルサレムは、イスラエルの王ダビデが建てた町で、そこは「王の都」と呼ばれました。主イエスは、ダビデの王座を継ぐ者として、いや、ダビデ以上の王、神の国の王としてご自分の都に入城したのです。ふつう、王は馬に乗るのですが、イエスは民衆の乗り物である「ろば」に乗りました。それは、ゼカリヤ 9:9-11 にある預言の成就でした。ゼカリヤ 9:9 にこう書かれています。

シオンの娘よ。大いに喜べ。

エルサレムの娘よ。喜び叫べ。

見よ。あなたの王があなたのところに来られる。

この方は正しい方で、救いを賜わり、

柔和で、ろばに乗られる。

それも、雌ろばの子の子ろばに。

ゼカリヤ書には、世界を救う、すべての人の王が来られ、この王は「ろばの子」に乗るほどに柔和な王であると預言されています。背の高い馬に乗ると、人々を上から見下ろすようになるのですが、ろばに乗れば、人々と肩を並べ、人々の歩く早さで進みむことができます。イエスは、このときだけでなく、いつも、文字通り、人々と肩を並べ、人々と共に歩み続けた「柔和」な王で、ゼカリヤが預言したとおりのお方でした。

ゼカリヤ書はまた、この王は「平和の王」だとも言っています。ゼカリヤ 9:10 にこう書かれています。

わたしは戦車をエフライムから、

軍馬をエルサレムから絶やす。

戦いの弓も断たれる。

この方は諸国の民に平和を告げ、
その支配は海から海へ、
大川から地の果てに至る。

馬は戦争に使います。イエスは馬ではなく、ろばの子に乗ることによって、ご自分が平和の王であることを示されました。

この王が与える平和は、どんな平和でしょうか。それは、神と人との平和です。イエスは、神と人との仲立ちとなり、罪を犯して神に敵対していた人類に、まず、神との和解、平和をもたらしてくださいました。この神との平和によって本当の平和、平安を味わうことができます。イエスを知るまでは、一時的な「気休め」はあっても、どんな時も私たちを支える、平和、平安を持っていませんでした。イエスがくださる平和だけが本当の平和です。

また、イエスは、この世界に恒久的な平和を与えてくださいます。人間の力だけで作り出した平和は、ほんの僅かな間だけしか続きません。人類は第一次、第二次のふたつの世界対戦を経て、国々が争い続けていたら自滅するしかないことを思い知らされました。そして、平和のための枠組みが作られましたが、戦争から 75 年過ぎて、そうしたものは、すべて崩れていきました。日本は、戦後、「戦争放棄」を憲法に定め、平和国家として生まれ変わりました。ところが、そのような憲法は時代にそぐわないから変えてしまおうという議論が盛んに行われ、かつての誤った道に進もうとしています。こうし

たことは日本だけでなく、多くの国々でも同じです。世界は危うい時代を迎えています。しかし、私たちは、平和の王であるイエスがもう一度この世界に來られ、戦車も、軍馬も、弓も矢も、現代で言えば、軍艦も、戦闘機も、ミサイルもいない世界をもたらしてくださるのを待ち望んでいます。

では、イエスはどのようにして、この平和、平安を勝ち取ってくださったのでしょうか。続くゼカリヤ 9:11 は、こう言っています。

あなたについても、
あなたとの契約の血によって、
わたしはあなたの捕われ人を、
水のない穴から解き放つ。

ゼカリヤ 9:11 の「契約の血」は、イエスが十字架の上で流された血のことです。イエスは、柔和なお方で、民衆の背の高さまで降りてこられ、人々と肩を並べて歩いてくださいましたが、そればかりでなく、ご自分をさらに低くし、人々のしもべとなり、人々の罪を背負って、十字架にかかられました。それは人を罪と死という、底なしの穴から救い出すためでした。ゼカリヤ書は「わたしはあなたの捕われ人を、水のない穴から解き放つ」と預言していますが、これは、イエスが、私たちを靈的な暗黒から、たましいの渇きから、罪の束縛から救い出してくださることを言っています。

国を外敵から守り、経済的に繁栄させた王は多くいたでしょう。しかし、人々に靈的な救いを与えることので

きた王は、イエスの他ありません。ユダヤの人々は、ローマ帝国に苦しめられていて、ユダヤを独立させてくれる王を待ち望んでいました。イエスはその王ではないかと期待していました。確かにイエスは王です。しかし、イエスはローマ帝国からの解放ではなく、罪と死の帝国からの救いを与えてくださる王でした。しかも、それをご自分の命をかけて成し遂げてくださいました。十字架は、人の目には敗北に見えましたが、イエスのご自分の死によって死を滅ぼし、復活によってその勝利を明らかにしてくださったのです。イエスこそ、十字架に至るまでご自分を低くした「柔和な王」、その血によって、神との平和の契約を打ち立ててくださった「平和の君」です。聖書の預言の通りです。

二、イエスを迎えた人々

次に、人々が、イエスをどのように迎えたかを見ましましょう。

イエスがふたりの弟子に命じて、ろばの子を引いてこさせ、ろばの子に乗ると、人々は、イエスが進む道に自分たちの上着を敷き、また、手に手にしゅろの葉を持って「祝福あれ。主の御名によって来られる王に」（ルカ 19:38）と賛美を歌いました。人々は、聖書が預言していた王としてイエスを迎え入れたのです。

このことから二つのことを学ぶことができます。その一つは、王であるイエスを「従順な心」で迎えることです。イエスが乗ったろばの子はひもでつながれていました。ふたりの弟子たちがそれをほどいて連れて行こうと

すると、持ち主が「なぜ、このろばの子をほどくのか」と弟子たちに言いました。弟子たちは、この時、イエスに教えられたように、「主がお入用なのです」と言うと、持ち主は、ろばの子をほどいて弟子たちに渡しました。何に使うのか、どうするのかという質問は何一つありませんでした。この人は「主がお入用なのです」という言葉ひとつで、イエスが求めるものを差し出しています。神の国の民は、その王に仕えるのに、従順でなければなりません。柔和な王が求めるのは、その民の従順さです。そして、進んで主のご用のために差し出すなら、それは何倍もの祝福になって返ってくるのです。ろばが人や荷物を乗せるようになるには、訓練が必要です。おそらく、このろばの子はまだ人を乗せたことがなかったことでしょう。イエスは、人を乗せることを、このろばの子に教えました。エルサレムに向かう道を歩くうちに、ろばの子は、すっかり訓練されました。訓練されたろばを返してもらった持ち主は、その従順に対する報いを受けたのです。

二つ目は「賛美の心」です。ルカの福音書は、弟子たちが「喜んで大声に神を賛美し始めた」と言っています。フットボールでも、ベースボールでも、ひいきのチームが試合に勝つと、ファンは「大声で」その勝利をたたえます。そんな時に下を向いてぼそぼそと口ごもる人は誰もいません。私たちの主であり王である救い主イエス・キリストをたたえるのも同じです。いや、それ以上でなければなりません。今は、「コロナ」のた

め大きな声が出せなくなっていますが、心では大いにイエスを賛美したいものです。

三、イエスの訪れ

最後に、イエスの「エルサレム入城」が、今日の私たちに何を教えているかを考えてみましょう。

このとき、人々が歌った賛美は、詩篇 118 篇から取られたものです。詩篇 118:25-26 では、

ああ、主よ。どうぞ救ってください。

ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。

主の御名によって来る人に、祝福があるように。

私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。

とあります。「どうぞ救ってください」という言葉が「ホサナ」となり、人々は「ホサナ、主の御名によってきたる者に、祝福あれ」と歌ったわけです。

詩篇 118 篇は過越祭の時に歌われる賛美ですが、教会では、聖餐のときに、「いと高きところに、ホサナ。主の御名によって来るお方に祝福あれ」と、同じ賛美を歌うようになりました。過越祭には子羊が屠られました。教会の聖餐では、イエスが「世の罪を取り除く神の子羊」となって、私たちのために屠られたことを覚えます。そして、そのイエスが、パンと杯の形で訪れ、ここにおられることを信じます。飲んだり食べたりしたものがからだの中に入るように、聖餐を受けるとき、イエスが私たちの内面に、また生活の中に入ってこられると信じます。聖餐では、私たち自身を王の都とし、そこに訪

れてくださる王なるイエスを迎え入れるのです。

聖餐がない御言葉の礼拝であっても、イエスは、御言葉と聖霊によって、恵みと祝福をもって、そこに訪れてくださいます。この礼拝に、また、私たちの日々の生活に訪れてくださいます。そして、やがての時には、世界を新しくするために、栄光と力をもって、この地を訪れてくださいます。ですから、教会は、エルサレム入城の時の賛美を、今も、イエスがもう一度世に来られるときまで、「いと高きところに、ホサナ。主の御名によって来るお方に祝福あれ」と歌い続けるのです。

イエスはたんなる人生の教師ではありません。王であり、主であるお方です。人類の歴史を通して預言されてきた「来るべきお方」です。しかも、私たちと共に歩んでくださる「柔和な王」、また、私たちのために血を流し、それによって神との平和をくださる「平和の君」です。きょうの箇所は、私たちに、イエスをそのようなお方として迎え入れるよう教えています。

イエスはこの後、エルサレムに近づいたとき、都を見て、そのために泣いて言われました。

「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して墨を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」（ルカ 19:41-44）

イエスの恵みの訪れを受け入れなかったエルサレムは、それからちょうど40年後、紀元70年に、ローマの將軍でのちに皇帝になったティトゥスに滅ぼされてしまいました。イエスは、それを予告して、「それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ」と言われました。なんと悲しい言葉でしょう。そんな言葉を聞かなくてもよいように、今、このとき、イエスの恵みの訪れを、素直な心で、喜んで受け入れましょう。そして、イエスの救いのわざを、大いに喜び、賛美しましょう。

(祈り)

父なる神さま、イエスが柔和な王、平和の君としてエルサレムを訪れたように、今も、恵みとあわれみ、救いを携えて、私たちを訪れてくださることを感謝します。イエスこそ、主の御名によって来られたお方、もう一度来られるお方です。週ごとの礼拝で、また日毎の生活で、イエスを私たちの王、また主として迎え、喜びをもって、主を賛美して歩む私たちとしてください。主イエスのお名前です。

神のものは神に

ルカ 20:19-26

20:19 律法学者、祭司長たちは、イエスが自分たちをさしてこのたとえを話されると気づいたので、この際イエスに手をかけて捕えようとしたが、やはり民衆を恐れた。

20:20 さて、機会をねらっていた彼らは、義人を装った間者を送り、イエスのことばを取り上げて、総督の支配と権威にイエスを引き渡そう、と計った。

20:21 その間者たちは、イエスに質問して言った。「先生。私たちは、あなたがお話しになり、お教えになることは正しく、またあなたは分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。

20:22 ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」

20:23 イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。

20:24 「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです。」と言った。

20:25 すると彼らに言われた。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

20:26 彼らは、民衆の前でイエスのことばじりをつかむことができず、お答えに驚嘆して黙ってしまった。

一、神殿での教え

エルサレムに入城したあと、イエスは神殿で人々に数多くのことを教えました。イエスが「神殿で人々を教えた」と聞くと、私たちは「イエスがガリラヤだけでなく、エルサレムでも大勢の人を教えることができてもよかった」と思ってしまうのですが、イエスを取り巻く状況

は決して良いものではありませんでした。

イエスがラザロを生き返らせてから、祭司長やパリサイ人たちは最高法院を開いて、イエスを殺害する計画を立てました。そして、「イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように」という命令を出しました。いわば「指名手配」のようなものです。それでイエスは、ラザロを生き返らせてから、しばらくユダヤの地を離れ、身を隠していました。過越祭を守るためにエルサレム入りした人々の間で、「イエスは、ほんとうに、この過越祭にくるのだろうか」と心配する声もありました（ヨハネ 11:56-57）。

しかし、イエスはエルサレムにやって来ました。隠れてではなく、大勢の人々の賛美の中を、ろばの子に乗って来られたのです。そして、白昼堂々と、神殿で人々を教えました。イエスの回りにはいつも群衆がいたので、祭司長やパリサイ人たちは、群衆に妨げられることを恐れ、イエスを捕まえることができませんでした（19節）。しかし、彼らはそれであきらめることはしませんでした。イエスが夜、休んでいる場所をつきとめ、真夜中に寝込みを襲って捕まえようと企みました。そしてその企みを実行に移すため、イスカリオテ・ユダを買収したのでした。また、イエスが群衆を教えているところに律法学者を送り込んで、トリッキーな質問をさせ、群衆の前でイエスを困らせ、人々の心をイエスから引き離そうともしました（20節）。

二、カイザルのものはカイザルに

ユダヤの指導者たちから派遣されてきた人々は、「私たちが、カイザル〔ローマ皇帝〕に税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか」（22節）とイエスに質問しましたが、もし、イエスが「カイザルに税を納めるのは律法にかなっている」と言ったら、彼らは「律法のどこにカイザルのことが書いてあるのか、それはユダヤ人の誇りを踏みにじり、ローマに屈服することだ」と言い、もし、「それは律法にかなっていない」と答えたら、「あなたはローマに反逆する者だ」と言って訴えようと待ち構えていたのです。イエスは彼らのたくらみを見抜いて、こう言いました。「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。」誰かがふところの金入れからそれを取り出し、手に乗せ、イエスに見せました。イエスはそれを見て「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか」と言いました。イエスの時代のデナリ銀貨には、ローマ皇帝アウグストゥスの肖像が刻まれていたので、彼らは答えました。「カイザルのです。」するとイエスはこう言いました。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

ローマへの納税はローマの通貨で行います。ローマの通貨はカイザルのものだから「カイザルに返しなさい」、しかし、律法が命じている神への義務は「神に返しなさい」というわけです。イエスの答は神の律法にかなない、また理性にかなったものでした。反対者たちはイ

エスのことばじりをとらえることができず、イエスを罫にかけようとして、かえって、自分たちがやりこめられてしまったのです。

「カイザルのものはカイザルに。」教会は、この教えに従ってきました。ローマ 13:1-8 には「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。…あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。…他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」と教えています。立てられた権威に従い、税を納めることは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」（レビ 19:18）という律法の戒めに適ったことなのです。

信仰者は法を守り、良い市民であろうとします。神に対して誠実な人は、人に対しても誠実であろうとし、自分の言動に責任を持って生きる努力をします。信仰者が仕事や人間関係で不誠実であったら、その人の神への誠実さが疑われてもやむをえないでしょう。神への信仰、つまり、神との正しい関係が、人と人との関係の中にも、また、自分が果たすべき仕事においても、反映されていくとき、それが「信仰の証」となり、真実な神を人々に知らせるものとなるのです。

また、信仰者には、政府や社会に対してたんに義務や責任を果たすだけでなく、それ以上のことが求められています。それは、祈ることです。テモテ第一 2:1-3 にこう教えられています。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。」大統領、知事、市長、また企業の CEO などに対して、私たちは不満を口にするのはあっても、そうした人々が正しくものごとを行うことができるように祈ることが少ないと思います。よく、「社会が悪くなった」と嘆くことがあります。では、この社会のために自分がどれだけ祈ってきたのか、イエスが教えたように、「地の塩」になり「世の光」になってきたのかと問われると、神の前で悔い改めるしかありません。聖書が教えるとおりに、「上に立つ」人々のために、よく祈る者になりたいと思います。

三、神のものは神に

「カイザルのものはカイザルに。」これは、信仰者がそれぞれの国で良き市民として、その義務を果たすことを教えていますが、実は、信仰者には、もうひとつの国があります。それは神の国です。聖書が「私たちの国籍は天にあります」（ピリピ 3:20）と言っているように、

すべてのキリスト者は、地上の国籍と天の国籍の両方を持つ「二重国籍者」です。イエスが「神のものは神に返しなさい」と言われたのは、神の国の民としての義務、責任を果たすことを言われたのです。地上で市民としての義務を果たすことは「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という戒めに基づいていますが、神の国の民としての義務を果たすことは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記6:5）という戒めに基づいています。

イエスは「神のものは神に返しなさい」と言われましたが、私たちが持っているもので、神のものでないものは何一つありません。私たちは皆、神に造られ、神に養われ、神によって守られてきました。いのちも、財産も、能力も、時間も、すべては神のものであります。この国も、この州も、この町も神のものであります。すべてを神にお返しして当然なのですが、神は、私たちにすべてとはおっしゃらず、与えられたものの十分の一、また時間であれば七日に一日をお求めになるだけで、残りの90パーセント、ほとんどの部分を私たちの自由にらせてくださいました。私たちにはそらを神からの恵み、祝福として楽しむことを許されています。この寛大な神に感謝し、「自由に」神に献げるのです。

「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に。」初代のキリスト者はこの原則に従い、政治も社会もこの原則を守ってきました。ところが、ローマ皇帝がキリスト者に皇帝礼拝を強要しはじめたとき、この原則が破れ

ました。皇帝アウグストゥスが紀元 14 年に亡くなった後、歴代の皇帝が「神」として祀られるようになりました。皇帝の像に香を焚き、神酒を注ぎ、皇帝の守護神に誓いを立てる儀式が行われたのです。81-91 年に皇帝であったドミティアヌスは、生きているうちに自分が「主にして神である」と主張し、キリスト者にも皇帝礼拝を強要しました。使徒ヨハネがパトモス島に島流しにされたのはこのドミティアヌス帝の時でした。ヨハネはパトモス島からアジアの 7 つの教会へのメッセージを書きましたが、ペルガモ教会へのメッセージの中で、次のイエスの言葉を伝えています。「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」（黙示録 2:13）ペルガモにはゼウスの神殿と皇帝礼拝の神殿とがありました。黙示録 2:13 の「サタンの王座」という言葉は、そうしたものを指しています。キリスト者は「カイザルのものはカイザルに」という原則に従って、忠実なローマ市民として生活していました。しかし、神でないものを神として礼拝することは「神のものは神に」という、信仰者にとって一番大切なものを否定することでしたから、キリスト者は皇帝礼拝を拒否しました。その結果、教会は非合法の危険な団体とみなされ、迫害を受けたのです。そのため多くの殉教者が生まれました。ペルガモ教会のアンテパスもまた、皇帝礼拝

を拒否して殉教した人でした。しかし、「殉教者の血は教会の種となった」という言葉の通り、教会は、迫害されれば、されるほど、強くなり、ローマ帝国の隅々にまで広がっていったのです。

同じようなことは歴史の中で繰り返されてきましたが、まことの信仰者たちは、国家であれ、何であれ、それが神にとってかわって、礼拝や忠誠を要求するようなことがあったなら、それに対して「NO」と言い、「神のものは神に」と主張してきました。イエスは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」との戒めを第一の戒めと呼び、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」との戒めを第二の戒めと呼びました。神への信仰、愛、忠誠が第一です。この世のどんな者も、神に代わって自分を礼拝せよ、自分を愛せということとはできないのです。

信仰の自由のあるアメリカでは「皇帝礼拝」のようなことを強要されることはないでしょう。しかし、「迫害」の無いところでは、「誘惑」が強いものです。金銭や財産、地位や名誉、その他、この世のものを、信仰者が、自分から進んで「神」にしてしまい、それにひれ伏してしまう誘惑がいたるところに潜んでいます。当然、神に対して向けるべき思いを、神以外のものに向けさせる力が強く働いています。そんなとき、「神のものは神に」というイエスの言葉を思い返し、誘惑を斥けましょう。私たちは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」との第一の戒めを守

り、「神のものは神に」お返ししていくことによって始めて、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」との戒め守ることができるようになります。神に堅く信頼し、神を喜ぶ人がはじめて、職場でも、さまざまな人間関係においても、人々から信頼され、人々に喜ばれる歩みをすることができるのです。「神のものは神に。」この原則に立って、この一週も歩みましょう。

(祈り)

父なる神さま、きょう、もう一度、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」という原則を教えてください、感謝します。イエスご自身がどんな場合でも、父なる神さま、あなたへの愛を第一にし、みこころに服従されたように、私たちもその足跡に従う者としてください。主イエスのお名前です。

新しい契約

ルカ 22:19-20

22:19 それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。」

22:20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」

一、過越の食事

ある人と一緒に食事をしていたとき、私も、その人もいっしょにミート・バン（肉まんじゅう）を取って食べました。その人は「これを食べるたびに、こどものころ、学校に持っていった昼食がいつも肉まんじゅうだったのを思い出すんですよ」と話してくれました。私は、電車の駅の構内で売っていた肉まんじゅうをおみやげに買って帰ったことを思い出します。家に帰ってもまだ暖かく、夜食にちょうどよいものでした。それぞれの食べ物は過去の記憶とつながっていて、それを食べるたびに、それに関連した出来事を思い出すものです。

サンクスギビング・デーには、ターキーとクランベリー・ソース、ポテトとパンプキン・パイ、それにコーンを食べます。四百年前に開拓者が食べたのと同じものを今も食べます。メイフラワー号はヴァージニアを目指していましたが、悪天候のためコースを外れ、寒さの厳しいマサチューセッツのケープコッドに錨を降ろしました。陸地が雪で覆われていたため、人々は船に留まって冬を過ごしました。飢えと寒さ、そして病気のため、102

名の乗客のうち半数が亡くなり、生き残ったのはわずか50名でした。そうした困難にもかかわらず、春になって人々は上陸し、先住民の廃村に家を建て、田畑を耕し、秋には新天地での最初の収穫を祝いました。それで、そのとき食べたと言われているものを、今でも食べることによって、アメリカのルーツを覚えてきたのです。

それはどの民族も同じで、ユダヤの人々は、過越祭（ペサハ）には特別な食事をして、自分たちの民族のルーツを心に刻んできました。過越祭の夕食（セデル）には小羊のすねの骨、苦菜、クルミとデーツでつくるペーストなどを食べます。子羊の骨は、今では、骨つきのチキンで代用されるようですが、それは、「過越の子羊」を覚えるためのものです。エジプトに災いが臨んだとき、イスラエルの人々は家ごとに一頭の子羊を屠り、その血を家の入口に塗りました。血が塗られた家には災いが過ぎ越し、イスラエルはそれによって災いを逃れたのです。苦菜はエジプトでの奴隷の苦しみを覚えるもので、クルミとデーツでつくるペーストは先祖たちがレンガ造りの労働をさせられたことを思い起こさせるものです。過越の食事は、「ハガダー」と呼ばれる一定の儀式に従って行われます。キャンドルを灯し、祝福の杯を挙げ、手を洗い、塩水にパセリを浸し、パンを裂くなど、順番が決まっており、人々はそうした過越祭の食事を通して、神がイスラエルの人々を死の災いから救い、エジプトの奴隷から解放し、「神の民」としてくださったことを、毎年、繰り返して記念し、記憶したのです。過越

の食事の中心は、神が、イスラエルとの間に立てられた契約です。それは「わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる」（出エジプト6:7）という契約でした。

きょうの箇所は、イエスが「パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与え…食事の後、杯も同じようにした」とありますが、これは、イエスが過越の食事の儀式に従ったことを表しています。イエスが弟子たちと一しょにした食事は「過越の食事」でした。そして、過越の食事は神と人との契約・関係・まじわりを確かなものにするものであり、神が私たちにとってどういうお方であり、私たちが神にとって何者であるかを教えるものだったのです。

二、新しい契約

イエスは、この「過越の食事」に新しい意味を込めました。それまでの契約は、神がイスラエルの神であり、イスラエルが神の民であって、それは、イスラエルの子孫、ユダヤ民族に限定されていました。ところが、イエスは、「わたしはあなたの神となり、あなたはわたしの民となる」という神と人との契約を、ユダヤの人々だけでなく、イエス・キリストを信じるすべての人に広げてくださったのです。

イエスのご自分の十字架を予告して「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、《多くの人》のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」（マルコ 10:45）と

言いました。ここで「多くの人」と言われているのは「すべての人」という意味です。イエスがご自分の命を投げ出したのは、ユダヤの人々のためだけでなく、世界中のあらゆる人のためでした。また、マタイ 26:28 やマルコ 14:24 にも「これはわたしの契約の血です。《多くの人》のために流されるものです」とあります。イエスが、全人類のすべての罪を背負い、そのために血を流してくださったことによって、いままで「神の民」から除外されていた人々にも、「神の民」となる道が開かれたのです。

「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」とあるように、イエスは、神がモーセを介して、イスラエルの人々との間に立てた契約を「古い契約」（旧約）と呼び、ご自分を介して立てられる契約を「新しい契約」（新約）と呼びました。

契約というものは、二人以上の者が互いに約束を守りあうことによって成り立ちます。どちらか一方がそれを守らなかつたら、契約は解消されます。私は、以前、銀行を通してプライバシー保護の契約に入っていたのですが、銀行が契約していた会社が契約通りの業務をしていなかったため、契約が打ち切れ、そのために払ったお金が戻ってきたことがあります。また、保険会社がちゃんと契約を守っていても、消費者のほうで保険金を払う義務を怠ったなら、その契約は終了します。同じように、イスラエルがいくら自分たちは「神の民」だと主張しても、神を信じることも、礼拝することもなく、か

えって偶像礼拝をし、神の民に求められる正義も公正もないがしろにして、神の聖なる御名を汚し、他の人々の物笑いとなるなら、その契約は解消されるのです。

ホセア 1:9 にこうあります。「主は仰せられた。『その子をロ・アミと名づけよ。あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないからだ。』」イスラエルが神との契約を破ったので、イスラエルはもはや神の民ではなくなったというのです。ところが、次の10節には、突然のようにして「イスラエル人の数は、海の砂のようになり、量ることも数えることもできなくなる。彼らは、『あなたがたはわたしの民ではない』と言われた所で、『あなたがたは生ける神の子らだ』と言われるようになる」と書かれています。何度も何度も逆らい続けたイスラエルとの契約を解消することは、神にとっては、当然のこと、正しいことであるのに、神は、ご自分に背いた民を惜しみ、その回復のために契約を新しくしてくださるといいます。

映画やテレビに出ている人が不祥事を起こしたら、出演契約が破棄され番組から降ろされるだけでなく、違約金を請求されます。もう一度そこに戻ることはおそらく不可能でしょう。ところが、神は、神に対して罪を犯した者たちと、もういちど契約を結んでくださるといいます。聖なる神と罪ある人間との契約、そんなことはありません。人間の世界でもそんなことはありません。しかし、愛とあわれみの神、回復と癒やしの神は、そのことをしてくださったのです。エレミヤ 31:31-33

はそれを預言してこう言っています。

見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——主の御告げ。——彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——主の御告げ。——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

神は、この新しい契約に、イスラエル以外の人々も含めておられます。キリストを信じる者には、イスラエルと同じ、いや、それ以上の「神の民」としての幸いが与えられるのです。

三、契約の成就

過越の食事のとき、イエスは、この契約がどのようにして実現するかを目に見えるかたちで弟子たちに示しました。イエスはパンを裂いて弟子たちに与えて言いました。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。」パンが裂かれるように、イエスのからだは十字架の上で裂かれるのです。また、杯をささげて「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」と言いました。イエスは、はっきりと、「血を流す」、つまり、命を献げると言っています。過越のとき、子羊がほふられ、その血が流されました。それによってイスラエルの人々は滅びから救われ、

エジプトの奴隷から解放され、神の民となりました。そのように、イエスも血を流し、信じる者を罪と死の奴隷から救い出し、神の民としてくださるのです。聖書は、イエスを「神の子羊」（ヨハネ 1:29, 36）と呼び、「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです」と言っています（コリント第一 5:7）。

旧約時代、神と人との契約は犠牲の血によって確かなものとなりましたが、イエスはご自分の血によって、神と人との新しい契約を確かなものにしてくださったのです。神の御子をご自身を献げた以上の貴い犠牲はありません。あの十字架の犠牲によって、もはや、どんな動物犠牲の血も必要でなくなりました。イエス・キリストが私の罪のために十字架で血を流してくださった。そして、私を救うために復活された。このことを信じる者は、その血によって罪を赦され、復活の命によって、新しく生まれかわります。そして、新しくされた私たちの霊のうちに聖霊が住んでくださり、聖霊の力によって神の律法を喜び、それに従う者になれるのです。エレミヤ書で「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす」と言われていたことが聖霊によって成就するのです。イエスは、そのようにして、「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」との契約を成就してくださいました。

過越の食事のとき、イエスは弟子たちに「わたしを覚えてこれを行ないなさい」と命じました。ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の壁画が有名になってから、この食事

は一般には「最後の晩餐」と呼ばれるようになりました。もし、そう呼ぶなら、この食事は「最後の旧約の過越の食事」ということになります。旧約の過越の食事が指し示していた新しい契約はイエスによって成就したからです。この後、弟子たちは、過越の食事の代わりに、パン裂き、主の晩餐、聖餐と呼ばれるものを守り、イエスの十字架と復活によって成就した新しい契約を祝いました。イエスは旧約の「最後の晩餐」を、新約の「最初の晩餐」にしてくださったのです。

ほとんどの教会でそうしていますが、健康上の理由で水を飲む以外は、礼拝の場には、食べ物も飲み物も持ち込みません。食事は礼拝が終わってからします。しかし、ひとつだけ例外があります。それが、主の晩餐、聖餐です。この時だけは、礼拝で食べたり、飲んだりするのです。パンとぶどう酒だけの簡素な食事ですが、この時、イエスも私たちと共にいて、食事を共にしてくださるのです。聖書には「最後の晩餐」という言葉はありません。一般に考えられているように、これはイエスとのお別れの食事ではなかったからです。イエスの復活ののち、弟子たちはふたたびイエスと出会い、そして、教会で行う聖餐でイエスと食事を共にしその喜びを味わいました

神は、イエスの十字架によって立ててくさった契約を、神の側からは決して破ることはありません。それどころか、罪人を救ってご自分の民とするという契約を、聖餐によってより確かなものにしてくださいます。わた

私たちは聖餐にあずかるたびに、「神は私の神、私たちは神の民。主イエスは今、ここに私たちと共におられる」という確信を強められ、平安と喜びと力に満たされます。イエス・キリストに従う生活がそこから始まるのです。いつの日か、そこにイエスをお迎えする聖餐を、私たちも行いたいと思います。毎週の礼拝をその日の聖餐の準備として守っていきたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、私たちは「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい」「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」との言葉を聞き、聖餐の意味を学びました。この意味を十分に理解して、聖餐に臨むことができますよう、助けてください。私たちを聖餐に向けて整えてください。私たちの過越の子羊、イエス・キリストのお名前で祈ります。

この杯 ルカ 22:39-46

22:39 それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。

22:40 いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい。」と言われた。

22:41 そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。

22:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

22:43 すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスを力づけた。

22:44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。

22:45 イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。

22:46 それで、彼らに言われた。「なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい。」

一、苦しみの祈り

2004年に公開された映画、“The Passion of the Christ”はイエスの生涯の最後の12時間を克明に描いています。それが、あまりにもリアリスティックだったので、観客の中には気を失った人も出たほどでした。イエスが息を引き取られたのは午後3時ごろでしたから、その12時間前というと、午前3時、イエスがゲツセマネの園で祈っていたときでした。ですから、この映画もゲツセマネの祈りのシーンから始まっています。

イエスにとって、祈りの時は、常に喜びに満ちたもの

でした。ルカ 10:21 にイエスの祈りが記されているのですが、そこには、「ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた」とあります。イエスにとって祈りは「喜び」でした。祈りは、父なる神とのまじわりの時だったからです。

イエスはルカ 10:22 でこう言われました。「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。」イエスはご自分が神の御子であり救い主であることを明らかにしましたが、ご自分の民族、ユダヤの人々はそれを受け入れませんでした。イエスは故郷のナザレの町の人々からも斥けられました。そんな中で、イエスを一番良く知っておられるのは、父なる神でした。イエスは人々の抵抗や拒否に遭うたびに、自分を一番良く知っておられる父なる神との祈りに慰めを得たと思います。人間的な言い方をすれば、この世に来られたイエスは、父の家から見ず知らずの外国にただひとり遣わされてきたような状態でした。イエスにとって、祈りは、本国の父親と電話で会話をするようなもので、それは楽しく、うれしいものだったのです。

ところが、きょうの箇所 44 節には「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」とあります。イエスにとって祈りが苦しみであったのは、おそらく、これが始めてだったで

しょう。「ゲツセマネ」という場所の名前には「油絞り」という意味があります。オリーブ畑の中にはオリーブの油を絞る場所がありました。オリーブの実が挽き臼に入れられ、砕かれるのです。イエスもまた「ゲツセマネ」で、オリーブが油を絞り出すように、血の汗を絞り出して祈りました。

この祈りが終わると、役人たちが剣や棍棒を持ってやってきて、イエスを捕まえ、大祭司のところに連れて行きました。一部の人々だけで真夜中に行われた不当な宗教裁判によってイエスは死刑を宣告されました。そして、夜が明けるとすぐにローマ総督ピラトのもとに送られました。総督ピラトは、なんの罪もイエスに認めることができなかつたのですが、群衆の声に負けて、イエスを十字架に引き渡しました。イエスはローマ兵から容赦のない鞭を受け、茨の冠をかぶせられ、さんざんに痛めつけられたあと、十字架を背負わされて、ゴルゴタの処刑場に向かいました。十字架刑はこの世で最も残酷な処刑で、人に極限の痛みを与えるものですが、その痛みは、ゲツセマネの園から、すでに始まっていたのでした。

二、みこころに従う祈り

では、イエスはゲツセマネで何を苦しんだのでしょうか。「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」とイエスは弟子たちに教えていました。「自分

の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」とも言いました（マタイ 10:28、38）。ですから、イエスが、これからその身に受けようとしている痛みを恐れたとは考えられません。実際、イエスは不法な裁判にも、ローマ兵の鞭にも、十字架の苦しみにも耐えています。イエスが苦しんだ苦しみは、もっと別のところにありました。それは何でしょうか。

その答は、「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください」（42 節）との祈りの中にあります。聖書には二種類の「杯」があります。ひとつは「祝福の杯」あるいは「救いの杯」です。詩篇 23:5 に「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています」とあり、詩篇 116:13 には「私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう」とあります。この杯は、神が人々の人生を祝福で満たしてくださることを表しています。もうひとつは、神の「怒りの杯」あるいは「審判の杯」です。イザヤ 51:17 にこうあります。「さめよ。さめよ。立ち上がれ。エルサレム。あなたは、主の手から、憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した。」これは、神の都エルサレムが、神に背き続けたため、神の「憤りの杯」を飲んで滅びるという預言です。黙示録 14:10 には「そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む」とあって、反キリストに従う人々への警告が書かれています。

イエスが「この杯」と言われのは、ふたつ目の杯、神の「審判の杯」でした。

では、神の審判とは何でしょうか。それは、最終的には神から遠ざけられ、神とのいっさいのまじわりを絶たれることにあります。イエスは十字架の上で人類のすべての罪を背負い、神の正義の審判を受け、神とのまじわりを絶たれました。それまで、神を「父よ」と呼んでいたイエスは、十字架の上では「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27:46）と叫んでいます。正午から午後三時までの間、ゴルゴタは暗闇に包まれました。光である神から切り離されるとき、そこには闇しかありません。この暗闇はイエスが本当に神に見捨てられたことを表しています。

神を信じないで、神とのまじわりを求めることもしない人は、神とのまじわりが絶たれることの恐ろしさを想像することさえできないでしょうが、父なる神とひとつであるお方、イエスは、神とのまじわりを絶たれることがどんなに恐ろしいことかをよく知っておられました。だから、イエスはこのように苦しんだのです。

人類を救うため、その罪を背負って神の審判を受ける、それが神のみこころであることを、イエスは十分に知っておられました。なのに、ここで、「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください」と祈っているのはなぜでしょうか。いよいよ十字架が迫ってきたので、それを恐れたからでしょうか。いいえ、この祈りは、父なる神にみこころを問いなおし、それを確

認する祈りでした。神に従おうとしない人は、決して、みこころを問いません。自分が好むままに道を選びます。しかし、みこころに従たい、みこころを行いたいと願う人は、すでに分かっていることであっても、立ち止まり、祈ってみこころを確認し、それから進んでいくのです。イエスはここで、父のみこころを確認し、「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」と祈って、それに従いました。

このときイエスは、私たち人間が犯す、ありとあらゆる罪が詰まった杯を飲み干されたのだと思います。それを飲むことによって罪のないお方が「罪」そのものとなって、罪の審判を受けたのです。それは、ご自分を信じる者の罪を赦すためでした。コリント第二 5:21 に「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです」とある通りです。私たちの「罪」がイエスに移され、イエスの「義」（神の前での正しさ）が私たちに移されたのです。

過越の食事のとき、イエスは「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」と言って弟子たちに杯を与えました。イエスが弟子たちに与えたのは「祝福の杯」でした。イエスは、私たちには、赦し、きよめ、神の愛、恵みなど、あらゆる祝福が一杯詰まった「救いの杯」をくださるため、私たちに代わって罪に対する神の「怒りの杯」を飲んでくださったのです。

三、イエスと共に祈る祈り

イエスは「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」と祈って、父なる神のみこころに従いました。イエスがみこころに従ってくださったことに私たちは救われています。もし、イエスが「この杯をわたしから取りのけてください」という祈りを押し通したとしたら、私たちに救いはなかったのです。「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」私たちはこのイエスの祈りにどんなに感謝しても、感謝しきれませんが、同時に、忘れてはならないことがあります。イエスを信じる私たちもまた、イエスに倣って、神のみこころを求め、それに従うことが求められているということです。

イエスの地上の生涯、そのみわざは、それによって人類を救うためのものでしたが、それと同時に、それは、救われた者の模範でもあったのです。イエスは弟子たちの足を洗ったとき、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです」（ヨハネ 13:15）と言っています。また、ペテロ第一 2:20-21 にこう書かれています。「罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがた

に模範を残されました。」イエスが十字架の苦しみ受けたのは私たちの救いのためでした。しかしそれを耐えたのは、私たちの模範のためでもあったのです。イエスを模範にすると言っても、それは、本当に足を洗い合うとか、実際に鞭打たれたり、十字架を背負ったりしなければならないということではありません。イエスの時代と私たちの時代では状況が違います。イエスの「模範に倣う」とはイエスのなされたことを真似ることではなく、イエスの謙遜や忍耐、また、神への忠誠や信頼を、私たちの日常の生活の中で実行することなのです。

イエスは私たちに「主の祈り」を与えてくださいました。「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」（マタイ 6:9-10）

「主の祈り」は「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」と続くように、日常の祈りです。普段の生活の中でみこころを祈り求めるよう教えられています。

「みこころを第一にする」ことは頭では分かっていますが、実際には難しいことです。だから、日毎にそれを祈るよう、イエスは教えたのです。

ある人が言いました。「『主の祈り』は弟子たちが祈る祈りだから『主の祈り』と呼ぶのはおかしい、『弟子の祈り』と呼ぶべきだ。」私はこう答えました。「それは、主イエスが教えてくださったから『主の祈り』でいいのです。また、この祈りは主がともに祈ってくださるから『主の祈り』なのです。」「みこころが行われます

よう」と祈れないときも、ゲツセマネで「みこころのとおりにしてください」と祈られたイエスが私たちと共に祈り、私たちをみこころを求める祈りへと導いてくださるのです。イエスは私たちとともに祈ってくださいます。そのことを信じ、ゲツセマネのイエスを覚えながら、日毎にみこころを求めて祈りましょう。

(祈り)

父なる神さま、自分の願いが先に立ち、「みこころが行われますように」と祈ることのできない私たちのために、イエスは「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」と祈ってくださいました。この救い主イエスを私たちの心に、生活に、人生に受け入れ、イエスと共に、あなたのみこころを願い求めていく私たちとしてください。私たちのために血の汗を流し祈ってくださったイエスのお名前です。

福音と日本文化 ⑬ 一あとがきにかえて

戦前の日本キリスト教団は、教会を戦争に協力させるために作られたものですが、それでも、教派が合同してひとつの教団となったことには、人々に教会がひとつであることを示す意義がありました。戦後新しくなった日本キリスト教団はじめ、伝統的な諸教団は日本キリスト教協議会（NCC）のもとに集まりましたが、より保守的な立場に立つ諸教派は日本福音同盟（JEA）のもとに「福音派」を形成しました。「福音派」は聖書の自由な解釈の危険を排し、社会運動よりも伝道に力を注ぎ、信徒に敬虔な生活を求めました。「福音派」教会は世界各国からの宣教師の協力を得て、牧師、伝道者を養成し、日本の各地に教会を建て、大きく成長しました。1948年に20万人だったプロテスタント信徒はJEAが創設された1968年には40万人になりました。

1960年代は、戦後のキリスト教ブームが去り、他の教派と同様、日本で最大の教団である日本キリスト教団も伝道の低迷期を迎えました。教団内に「社会派」と「教会派」が生まれ争うようになりました。当時盛んだった「革命思想に基づいた学生運動」が教会や神学校にまで持ち込まれ、対話不能の状態に陥りました。これらは、「福音」とは何なのかということに関して、基本的な理解と一致がなかったからでした。しかし、日本キリスト教団は、こうした混乱を乗り越え、1998年の教団総会では「21世紀を伝道の世紀としよう」という提案が可決されるようになりました。本来の信仰告白に立ち返り、教団再生の道を歩みはじめました。



Penguin Club

www.penguinclub.net